

思い出の動物たち

姫路市立動物園の50年歩みは、子どもたちに愛された忘れられない動物がたくさん。そんな中でも特に印象に残っている動物をピックアップしました。



ミナミケバナウオンバット「ボブ(オス)&ヘーゼル(メス)」

有袋類。ウオンバット科のほ乳動物でオーストラリアにしか生息しない希少種。ミナミケバナウオンバットは、日本ではここにしかいませんでした。「ボブ&ヘーゼル」は、S60年5月、姫路市がオーストラリアのアデレード市と姉妹都市になった際、親善動物として来園しました。夜行性のため昼間はいつも寝ていましたが、ナイト・ズーのときには穴を掘ったり大活躍でした。

ボブ:H10年11月15日肝炎のため死亡

ヘーゼル:H11年11月27日老衰のため死亡



ゴリラ「ゴン太」

S43年生まれ。動物園には満1才の時来園し、生涯の大半を園舎で暮らしました。幼年期には天井からぶら下がる古タイヤで運動したりしていましたが、青年期になるとストレスでお客さまに水やフンをかけたりするようになったことから、ストレス解消に日本酒やビールを与えたところ大好物に。酒を飲むゴリラとして話題になりました。また、「ゴン太」は国内最重量ゴリラでもあり、来園当時は20~30kgだった体重は270kgまでに増大。大相撲の小錦関と同体重でした。今でも春には胸をたたいて入園者を喜ばせ、冬にはつま先歩きをしながらイヤイヤ運動場に出ている姿など、数々の愛きょうのあるシーンが思い出されます。S61年(18才)に兵庫県動物愛護協会から「功労表彰」を受けました。

ゴン太:H6年2月1日肺炎のため死亡



ゾウ初代「姫子」

S26年にタイのバンコクから7才で来園。昭和28年には1,800kgだった体重がS41年には3,100kg。S55年には3,180kgと元気に成長していきました。園内では足に鎖をつけて飼育していましたが、若い頃には鎖をつけるのを嫌がって運動場を走り回り飼育員を困らせるなど、おちゃめな面も。また、サマースクールでは子どもたちといっしょに写真を撮ったり、餌をもらってごきげんでした。冬至に貰ったカボチャを上手に食べていたのも印象的です。そんな姫子でしたが、子どもたちからの「鎖をはずして」との声から、晴れて自由の身になって2年あまり。H6年に飼育員総出の看病もむなく眠るように息を引き取りました。52才。いつも人気者の姫子でしたが、現在は姫路科学館で骨格標本として展示されています。

姫子:H6年1月21日老衰のため死亡



オタリア「ごんぞう」

オタリアはアシカ科の一種で、別名「シーライオン」とも呼ばれています。「ごんぞう」は、その愛嬌あふれる風貌と体格で「ごんぞう」「ごんぞう」と親しまれ、入園者の人気者でした。H11年には兵庫県動物愛護協会から、「人と動物のふれあいに貢献した」として表彰されました。また、当園で23年以上飼われ、国内動物のオタリアの最長飼育記録を更新しました。

ごんぞう:H11年10月6日老衰のため死亡



オオアリクイ

長い顔にふさふさのしっぽ。少々内また気味に歩く姿がユーモラスでしたが、前足には内側に向かって鋭いツメがあります。その名前通り、アリを常食にし、アリ塔を抱きかかえるようにし、アリ塔をこわして中から出てくるアリを舌で巻いて食べます。しかし、動物園ではアリがないので、300gの牛肉のミンチに400CCの牛乳、カルシウム剤やビタミン剤などを練ってエサに。園内一番の美食家でした。